

る所などへ植る草也、室町將軍正月御祝の供物に大山形と云物あり、それに山菅を用る事、大草流正月祝儀飾の繪に見えたり。

〔物類稱呼三生植〕麥門冬。せうがひげ。關西及四國共に、せうがひげと云、東國にてりうのひげと云、奥州にてたつのひげと云、尾州にて蛇のひげといふ。

〔古今要覽稿草木〕やますげ 麥門冬

やますげ本草和名 按にこの葉細小なりといへども、その形すこぶる山菅に似よりたるを以て名付しなるべし、又按に山菅は小葉の麥門冬にして、大葉の麥門冬は天和の比より以後の物なれど、物によりては後世より却て古のくはしき事いと多ければ、延喜の時には、この大葉のものもありけんを、山菅と稱せしにやらん、蛇の鬚物類品鑑須知、尉の鬚和漢三龍才圖會、雲龍の鬚江戸土記、麥門冬出雲風喜、按に此根穢麥に似たるを以て、麥門冬と名付たるよしは、既に弘景の説にみえたり、されどもそれにては、麥字の意は詳なれど、いまだ門冬の義をしらず、今按にこれを門冬といふものは、天門冬の門冬とおなじく、即門冬二合の音髦の義にして、此草細根極めて多く、形狀髦の如くにして、其中に穢麥のごとき、連珠をなすに塊あるによりて、麥門冬とは名付しなり、或其葉叢生髦の如く、また麥のごとしといへるにても、その義また通すべし、然るを時珍の説に、麥髦曰、穢此草根似麥而有鬚、故謂之麥穢冬、俗作門冬、便子字也といへど、字彙に穢は赤苗嘉穀、今赤粱粟とありて、麥髦の意見へす、時珍天門冬を釋して、草之茂者爲穢、此草蔓茂而功同麥門冬、といへるものとあはざれば、麥髦を穢といへるはうけがたし、

〔宜禁本草乾中草〕麥門冬 甘平微寒、強陰益精保神、定肺氣和地黃爲丸食後服去溫瘴變白明目、三月新根去心擣絞取汁和白蜜、銀器中重湯煮攪不停手、如飴乃成、酒化溫服、益心悅顏、安神益氣肥健甚驗衍義曰、治心肺虛熱虛勞客熱、可取苗作熟水飲加五味子人參爲生脈之劑、